

## 第三節 ポンペの医学開講

第二次海軍伝習派遣隊は安政四年三月朔日（一八五七年三月二十六日）、ヤパン号に搭乗し、ロッテルダムを出帆して、日本に向い、途中、リスボン、喜望峰、バタビア、マニラ等に寄港し、同年八月四日夕刻（陽暦九月二十一日）、長崎港外高鉾島近海に碇泊し、翌日出島に上陸したが、ポンペもその一行に加っていた。ポンペは日本に赴任するに際し、日本における内科学、外科学について研究する予定であった。然も、出島の商館長ドンケル・クルチウス Jan Hendrik Donker Curtius は幕府よりポンペに対して内科学及び外科学を教授すべきことを希望する旨を達して来ているので、その心得で準備を整えて貰いたい旨をポンペに伝えた。ポンペは喜んで依頼された教課を教えることを承諾した。

ポンペは出島に上陸後、長崎の美しさに目を見張ったが、そこではオランダ商館員たちとも接し、出島の植物

園中の家に落付いた。そして二日目には、奉行所訪問や貨物陸揚げなど新寓居の整備に追われ、その後一週間は無為に過した。そのうち、幕府より派遣された医学伝習生松本良順等二・三名の来訪を受けた。そこで松本良順に生徒取締を依頼したが、その後も幕府の派遣した医学伝習生も増加し、陽暦十一月にペルス・ライケン等一行が長崎を引揚げて医学開講をするまでには四人の医学伝習生を托された。この四人は松本良順の他に、観光丸に搭乘する幕府海軍軍医、咸臨丸に搭乗する軍医と幕医中の高い家柄の人がいたが、三人は皆三十代の人であった。これらの人を試験してみると、医学の知識が全くないことが判った。即ち、古い治療書の拙い写本とオランダの治療法を僅か知っているが、外科は膏藥外科で、手術的外科には理解がない。解剖学、生理学、物理学、化学の知識は皆無である。そこでポンペは真の医学とはどんな

のか、医者たる者はかくあらねばならぬということを垂示することにし、ポンペは良順に西洋において行われている医学教育法、即ち基礎医学と臨床医学の二つの課程に分類し、その学科の全部を順を追って系統的に教授すべきことを条件として伝習生等に教育を進めることを伝えた。良順は直ちにこれを諒解し、早速奉行所に報じ、ポンペの要請に従って医学伝習が進められる自由を与えられ、同時に奉行等がポンペに協力する旨をもポンペに伝えた。幕府が派遣した伝習生の他、諸藩の学生（土肥峻造・榊原養庵は八月中旬に応募した。）及び長崎の医師たちが集り、九月中旬（陽暦十一月中旬）に至ってポンペを訪問し、授講を求めたのである。この時、ポンペのもとに集った医学生が多くは高令に過ぎること、又、ポンペの教えようとする基礎医学から始める学問が学生たちにとって余りに新し過ぎること、且つ難解なこの医学を最初から始めても到底ものにならないであろうことを考え、ポンペは学生たちに覚悟を質ねた。ポンペのこの質問に対し、集った学生たちはその受講を希望した。

## 第二章 長崎医学の基礎

そこで九月二十六日（陽暦十一月十二日）ポンペは海軍伝習の行われている長崎奉行所西役所において、学生たちを前に就任披露の講演をなした（ポンペ著『日本における五年間』）。そしてその翌日、ポンペは自ら作った講座時間表に従って、医学の講義を開始したのである。（一八五九年、パタビア発行、「オランダ領インド医学会议纪要」第七卷所収、一八五七年及び一八五八年、日本の出島における医務報告）前日の就任披露講演は自然科学の性質と状態、その文化に及ぼす影響について概説し、進んでこれを内科学及び外科学に応用すべき事を論じ、最後に学生諸氏の不撓不屈の研究を希望し、その学修に対しては能う限りの援助を与えるべき旨を述べた。

幕府医学伝習生松本良順は一同を代表してポンペの好意を謝し、併せてわが国の旧制度のために進歩を阻害されていた科学的研究で、一層便宜を得べき必要のあることを痛切に感得したことを言明した。

この開講演説に出席した人は幕府及び諸藩の派遣した者で、合計十四名（ポンペの『日本における五年間』に

### 第三節 ポンベの医学開講

は十二名を見た（と記している。）であつた。学生たちは極めて熱心に受講したが、ポンベの話す言葉が理解できないことが判り、オランダ通詞の通訳によって講義を進めねばならなかつた。そこでポンベは語学教育を依頼し、ポンベ自身も日本語の習得に努めた。ポンベの作つた講座表は、物理学、化学、繙帯学、系統解剖学、組織学、生理学総論及び各論、病理学総論及び病理治療学、調剤学、内科学及び外科学、眼科学の順で、時間があれば法医学及び医事法制、産科学を講義することとした。ポンベの講義は厳格であつたが、順序として最初は物理学、化学、解剖学、繙帯学等を毎日午前中に一時間半、午後一時間半、合計三時間ずつ講義し、年末まで六週間講義を続けた。ポンベは日本語を知らないこと、通詞（西慶太郎か）の通訳が時間を要すること、教科書のないことなどに悩んだ。学生のオランダ語の学力は大したものではなかつたが、松本良順と司馬凌海は相当正確に筆記した。オランダ通詞の中には非常に正確に通訳できる優秀な人もいたが、多くはポンベの用語をよく理解できず、

適切な説明を与えることにはむしろ無関心でさえあつた。そのうちポンベの日本語の勉強も進み、通訳の誤訳もしばしば発見するようになった。又、学生たちもオランダ語の学力を増し、漸くポンベの説明が判るようになった。

学生の中にはポンベの講義が厳しいので遂に退学した高年者も二・三あつた。良順はこの点を充分理解し、代りに諸藩の若い学生を入学させた。諸藩とは越前・武蔵・伊勢・筑前・長門・摂津・薩摩・肥前・神崎・豊後・肥後・佐渡が『日本における五年間』には挙げてあるが、良順がポンベの開講時より自分を介して従学した人を記して「登録人名小記」には文久二年閏八月二十二日（一八六二年十月十五日）のポンベの開講時までの受講者数は良順を含めて百三十六名である。然し、これは良順を介した人だけなので、ポンベの門人の全部ではない。なお数十人を下らない人がポンベに師事していた筈である。例えば安政五年九月二十六日（一八五八年十一月一日）カッテンダイケの報告には五十名の学生がいたと云うのに、登録人名録には良順を除いて四人しか数えられず、

入沢恭平の日記によれば、万延元年四月二十日（一八六〇年六月十日）入学後、二月目の六月二十日（陽暦八月六日）の条の次に掲げられた伝習所門人録に示された二十七人先学中、登籍人名録に記載の与えられていない人が四・五人いる。然も登籍人名録に万延元年秋入門した人の名も四人ほど伝習所門人録には見えているし、ポンペは『日本における五年間』に「間もなく入学者は約四十人に及んだ」と記している（後条参照）。処で学生は寸暇を惜んで勉学に努め、夜半に及び、各自の知識を増そうとした。そして内科学・外科学の講義の開始を待ち焦れたが、それをポンペは退けた。又、講義は一日四時間に減じ、午前中二時間、午後二時間とし、学生の過労を避け、復習の時間を充分にしたが、講義時間は安政五年八月十七日（一八五八年九月二十三日）及び同年十一月二十八日（一八五九年一月一日）のポンペの記載では何れも一日五時間である。

さて、安政五年八月十七日（一八五八年九月二十三日）までに解剖学の分科一般解剖学、骨学、靱帯学、筋

学、動脈管学の講義を終り、同月二十四日（陽暦九月三十日）には繃帯学の講義を終了した。その後、薬理学の一分科毒物学の講義を開始し、これを同年十一月二十七日（陽暦十二月三十一日）以前に済まし、引続き生理学を開講したが、毒物学の講義の際には多数の年輩の臨時聴講生が入学した。然し講義が終ると共に退学して完了した。これは毒物学が実用的であつたためであつた。一方、解剖学は神経学、内臓学などの残余の分科を引続き講義したが、同年十一月二十八日（一八五九年一月一日）、ポンペが新しく定めた講義時間表は次の通りであつた。

曜日		午前	午後
月	一般医学	化学	学
火	解剖学	生理学	学
水	一般医学	化学	学
木	解剖学	生理学	学
金	一般医学	化学	学
土	解剖学	採鉱学	

九時半より十一時迄

このうち、一般学は診断学乃至は臨床講義であつたと考えられるが、採鉱学は安政五年十一月二十七日（一八

### 第三節 ポンベの医学開講

五八年十二月二十七日）までに長崎奉行の要請があり、又、佐賀藩の希望もあって、新しい時間表に繰入れたが、これは二・三の少年が受講するに過ぎなかったので、やがて夜間に時間を繰変え、且つ短期間で終了した。（佐賀藩士は後に筆記録を出版した。）

次いで安政五年十二月十三日（一九五九年一月十日）より病理学総論を開講し、翌六年八月十三日（一八五九年九月九日）にはボンベの懇願による屍体解剖実習が西坂で実施され、万延元年十二月三十日（一八六一年二月九日）までに解剖学、生理学、化学、病理学総論、理学を終り、翌年正月七日（後に文久と改元。一八六一年二月十六日）より病理学総論の残余の他、新たに午前は治療学、午後は外科学を二回ずつ講義した。この時以後の講義に対しては、愈々臨床の学科でもあるので、学生たちは胸を躍らせていた。万延元年十二月二十一日（一八六一年一月三十一日）付、武谷棕亭・篠田正貞宛有吉周平書簡に「是迄之順序ハ無益ニハ属セズ候得共来正月ヨリノ伝習ハ唯々可然事ト相悦居申候<sub>ト</sub>、来治療法ハ能程事

変リ居申候ヒュヘランドノ療法ハ今ニ而ハ一向用ヒラレ不申由、来春ヨリ伝習之仕方ハ毎朝ボンベレスヲ与ヘ書ヲ毎夕又々松本氏講釈ニ相成候所ニ決申候逐一新發明ハ御掛合可申上候最早蘭人之伝習も少候間此後ハ決而無之事ニ松本氏ヨリ毎々承候何分二年ニ足ザルノ年月故宜敷御取斗可被下候治療書ニ差掛リ引取候事共有之ニ於テハ誠ニ無益而已漸く此節ニ至リ伝習も大半相分居申候若又業を終ラズ罷帰候而ハ第一為御国為道愈御國中蘭学ハ開ケ不申哉ニ相考候間何分其段御推察奉頼候」と記している（井上忠氏紹介による）。文中のヒュヘランドはフヘランド Christoph Willem Hufeland で、その内科書は江戸時代後期に尊重された。レスは教授を意味するが、この当時は松本良順が夕刻講義を持っていたことが伺われる。又、この引用書簡の始に、医学伝習が二年後に終ることが記されているが、オランダ人による医学伝習が終るといふのは国際政治の均衡と漢方医家の西洋医学打破の策動とによる噂であつたと考えられる。まだ岡部駿河守の奉行在任中のことである。

文久元年八月十七日（一八六一年九月二十一日）、養生所及び医学所の開院後、大村町の伝習所から新築の病院に移ったポンペは引続き講義を行い、薬理学・内科学・外科学及び眼科学臨床講義も調剤学実習も進歩したのである。（後条参照。）そして翌二年六月五日（一八六二年七月一日）以後、従来実施していた講義を全部終了、帰国に至るまでの間に法医学、医事法制、産科学を補講し、閏八月二十二日（陽暦十月十五日）に終了証書を授与したのである。

ここで、松本良順を介してポンペに従学した人の名を「登籍人名小記」によって示すと、次の通りである。

土肥晋裕、榊原養菴、司馬凌海、大槻玄俊、長三石、前田玄造、塚本道甫、有吉周平、緒方平三、橋本節斎、川北元立、名倉惟新、上司讓、塩田春海、熊野祥甫、伊藤裕平、上領道仁、中原玄快、入沢恭平、巖佐玄珪（岩佐純）田代萬隆、山本洪堂、長与専斎、八尾貫吾、郡元之進、郡豊、前田雲洞、奥田道有、吉雄幸沢、斎藤退蔵、荒瀬幾造、岡口等伝、長嶺圭朔、檜林三圭、黒田程蔵、

三好晋造、泉立建、高橋春甫、桂文久、長野昌英、渋谷良耳、宮田魯斎、井上仲民、島田東洋、大井熊耳、高山俊斎、吉雄主斎、藤田圭甫、内山誠菴、上滝寿安（鹿兒島寿安）、吉見雲台、柿田敬造、桐原玄海（花岡道節）、鈴木瑞慎（南部精一郎）、益田宗三、浅野恭斎、魚住順方、佐々木悌全、小島朴仙、加藤東斎（林洞斎）、佐々木東洋、関寛斎、山下玄岱、八木称平、丸田桃斎、内藤泰吉、日野文戴、西山秋橘、長野謙山、馬島春庭、山田有圭、宮永典常、吉田貞菴、綾野雲昌、斎藤寛一、中野精一、有木衛助、二宮収造、桜井仲温、岡村柳斎、木村遂菴、椋野元琢、島田洞愿、青木群平、高橋如圭、明田清洌、田永蘭亭（田上蘭亭か）、宇都宮健哉、佐々木玄綱、児島陽斎、松本三友、吉永永斎、竹内東庵、檜林栄叔、戸上玄達、西原元迪、岡田耕紘、沙沢元良、中村調、古川俊平、愛甲謙益、島欽哉、藁科松伯、中条某、松尾健造、原田水山、坂巻道達、伊東救庵、横田敬造、田中静洲、野中宗育、别所元牧、小野田梯弼、中村静敬、八幡原正元、工藤勇、半井春軒、西原元昌、西原春台、百武元礼、半

### 第三節 ポンペの医学開講

井仲菴、半井元端、橋本琢磨（後の綱常）、河内研蔵、三浦俊斎、中村宗見、重信伝栄、関弘道、三原介人、錦織一郎、鹿田道球、池田東園、片岡正、柿田杏庵、宇都宮龍山

以上百三十五名が文久二年閏八月二十二日（陽暦十月十五日）のポンペの帰国の挨拶までに松本良順を介して入門した人である。

そして、関寛斎の日記に記載されている人で、この名寄に見えない姓として、竹山祐卜、中野森之助（雪江）、丸山、井上、山本、高田、松平、上田、長谷川、神戸など十名ばかりがある。又、伴氏という人物があり、これは咸臨丸に乗組んでいた人で、或いはこの人がポンペの開講に際して、幕府に依頼された四人の中の一人ではなかったかと考えられる。又、上野彦馬はポンペの家にしばしば赴き、化学を学び、写真術を修得して『舎密局必携』（文久二年刊）を著わし、わが国最初の写真業を開いた。ポンペは上野彦馬が訪問した時は何時でも、他の人の入室を禁じてあるポンペの暗室に入ること許した

のである。ポンペの指導は誠に行届いたもので、厳しい教育の半面、門弟に対する愛情洵にこまやかなものがあった。その他、後年、長崎県病院に奉職した土屋寛之もポンペに学んだが、良順を介さないで、ポンペに師事した人としては佐藤尚中のように代講をつとめた人もある。